

避暑地の猫

父は黙したままであった。
ぼくは生まれて初めて、
父らしい父と
向かい合っている心持になった。



1985年 講談社

「Story」

軽井沢の病院に勤める医師が入院患者から聞いた、狂気とも言える過去の出来事とその顛末。久保修平は、戦争で負傷し百姓仕事ができなくなった父と、母、二歳年上の姉の四人で、軽井沢にある布施家の別荘番として、敷地の隅にある小さな木造の家で暮らしている。軽井沢で毎夏繰り広げられる、裕福なよそ者たちの喧騒。修平少年が、17歳の時に経験した淡い恋。修平家族と雇い主である布施金次郎との間に起った秘められた関係。その代償として結ばれた「八年後の約束」は、金次郎の家族も巻き込みながら事件へと発展する。上流階級の人々が優雅に過ごす避暑地・軽井沢の華やかさの裏側に漱む、おぞましい人間の欲求と崩壊が描かれる。

『軽井沢』

長野県北佐久郡軽井沢町は、日本の代表的な避暑地『軽井沢』として有名です。明治初期、軽井沢高原の持つ景観や気候が欧米諸国に似ていることから、日本の暑さに慣れない外国人たちの避暑地として賑わいはじめ、多くの別荘やホテルが建ち始めました。その後、大正初期には日本人富裕層たちも次々と別荘を持つようになり、より華やかな町へと変化してきました。また、多くの文人たちがその執筆活動のために滞在したことでも有名で、宮本輝氏も毎年この町で夏を過ごしています。

現在は、さまざまな観光客の訪れる町となっていますが、その美しさは町の人たちに大切に守られています。

■ 軽井沢を舞台としたその他の宮本氏の小説 ■

「眉墨」(『五千回の生死』収録、1987年・新潮社)

『ここに地終わり海始まる』(1991年・講談社) / 『オレンジの壺』(1993年・光文社)



参考:軽井沢観光協会ホームページ

<http://karuizawa-kankokyokai.jp/>

想像がつかない衝撃的な展開

「避暑地の猫」というタイトルから、何かふんわりした物語を思い描いていましたが、これは家族関係、主従関係の複雑な絡み合いから始また深い憎悪、そしてそれが殺意に変わり現実になるという恐ろしい始まりでした。鍵となるのは「ペルシャ猫」。

物語では猫はあまり出てこないのですが、その存在を忘ることはできないのです。